
あったかい、風が吹く

鈴懸みどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あったかい、風が吹く

【Nコード】

N5427U

【作者名】

鈴懸みどり

【あらすじ】

病院に勤務する司書さんと、そこで生活する患者さんのほのぼの話。患者さんの方が年下の男性。この人だけ、エセっぽい関西弁。司書さんは女性ですが、恋愛よりも友愛の方面に行きます。病院にいる他の患者さんや看護婦さんも出てきます。

偶然の（前書き）

お久しぶりです（笑）

久しぶりすぎてつたないかも…その時はすみません。

偶然の

薬品のおいが染み込む廊下に、
キョロキョロとあたりを見回す影がある。

「せっちゃん、どこや〜?」

廊下の先から、くすくす。と小さな笑い声が聞こえてきた。

そちらに顔を向けながら、人影がへとへの声を出す。

「もう俺、見つけんのムリ。せっちゃん、かくれんのうまいなあ?」
しかし足取りや姿勢に、言うほどの疲れはみられない。

どうやら。探している相手に油断させ、驚かせるつもりのようなのだ。

事実、誰にも聞こえない声量で

「…ぼちぼち見つけてもええかな。きつと書庫やろ。」
と呟いている。

そうして、あたりをつけた書庫へ来た時だった。

―ドサドサドサッ

明らかに、重いものが落ちた音がする。そして、音のした方向は。

「…!!せっちゃん!」

彼が急いで駆けつけてみると、髪の毛長い人が小さい女の子をかばっている。

まわりには本が散乱していた。

「赤巴^{せきは}ちゃん。こんにちは。」

薄暗くてよく見えないが、声と髪の毛の長さから女性だとわかる。

その人は女の子を抱き上げ、のんきにあいさつしている。

せきは、と呼ばれた女の子を認めた彼は、ホッとして近寄る。

「すみまへん!ほら、せっちゃんもありがとうとごめんなさい、は

？」

助けてくれた人に、せきはが顔を近づけ内緒話をするようなしぐさをする。

暗さに慣れてきた目で見ていると、

せきはに應じて耳を近づけた人は、せきはの話を聞いて破顔する。

「うん、いいよ。無事でよかった。」

せきはの頭をポンポン叩きながら

「でも、ここはあぶないから。かくれんぼに使っちゃだめだよ。」

と地面に下ろす。すると、女の子が小さくつぶやいた。

それが彼女には聞こえたのだろう。

「おおきくなったら、ね。」

と女の子を抱きしめ、嬉しそうに、頭をぐりぐりとなでる。

「で、えーと」

今更だが、見ない顔だと彼は気づく。

ナース服も、事務の制服も着ていない。

怪訝な声にハツとして、立ちあがりながら

「あ、ここで司書をやっている垣内葛です。かきうちかずら

よろしく願います。」

と自己紹介をする。

そこで彼は、少し前に看護師さんが言っていたことを思い出す。

確か、患者用の図書室を創設するため、新しく雇われた人だ。

『きれいな人だし、気さくだから患者さんに人気なのよ』

その時の話を思い出しながら、彼も自分の名前を言う。

「ここに入院している、狭山啓人さやまけいと言います。

あと俺、学生です。年う：同じくらいやし、タメ口でええですよ。

ゝてか、俺もしゃべりかたこっちでええやろか？」

はじめは、訛りが入った標準を話していたのに

最後はいつもの話し方へと、崩れていく昭人。

「ふふ。どうぞ。」

そのことと、年上、と言おうとして直したことがおかしかったのだろう。

葛は了承しながら、肩をゆらしている。

ひとしきり笑うと、何かに気づき手首の時計を見る葛。

「——と、せきはちゃん。そろそろ点滴の時間じゃない？」

啓人とせきはに、腕時計を見せて時刻を教える。

「おお、せや。せっちゃん、いこか？」

おびえたように、首を振る少女。

点滴の針が怖いのだろう。

その様子を見た葛は、先程の散らばった本の中から絵本を持ち表紙を見せると、口を開く。

「せきはちゃん。がんばったら、また本をもって行くからね。」

その言葉に反応したせきは。

しぶしぶといった様子で、書庫を出るのだった。

「せっちゃん。あの人、きれいやね。」

病室に戻る廊下を辿^{たど}っている時、啓人が言った。

長い髪が艶やかで、その隙間から見えた顔はすっきりとしていた。きれいで、あたたかな笑顔を^{ひと}する女性だった。

（ま、俺の好みとちゃうけど。）

ひとりごちていると、せきはが勢いよく顔を上げた。

「——っっ！」

「ん？なに？」

聞き取れなかったので、しゃがんで聞き返す。

『かずらさんを、とっちゃダメ。』

「…。」

ほんま、

かわええなあ。

「わかった。でも、おともだちにはなりたいなあ。ええかな？」
小さくうなづく、せきは。啓人がその頭をなで

「本、たのしみやね？」

と言う。ちいさな女の子は、今度は首を大きく、縦に動かした。

出会い：葛視点（前書き）

あとでな옵니다。

9月17日、この男の子のモデルにした人が誕生日でした。
教えてないから絶対見ないであろう…ふふ。

けーくんおめでとう。

出会い…葛視点

「かずらさん」

名前を呼ばれて顔をあげる。

視線の先に、先日知り合ったばかりの啓人、という青年がいた。

彼は…一言でいえば、憎めない奴。

外見は、亜麻色の髪に色が白く、中世的だ。

年よりも落ち着いているように見えて、甘え上手。

そして、たまに見せる色男のような言動。

色めきたつ若いナースの気がわからないでもない。

「啓人くん。今日はどうしたの。」

思考がおかしな方向に行く前に頭を振り、彼に質問する。

「病室いてもヒマ。遊びに来た」

入院しているんだよね、この人。

と葛は思うが、あえて他の言葉を啓人にかける。

「て言っても、来週まで何もないのに。」

患者向けの図書室は、次の月曜からの公開だ。

この病院は、以前は本のある部屋と言えば、

子ども病棟に遊具と絵本のある部屋と、医療専門書が並ぶ図書室のみ。

大人の患者向けには、提携した図書館から職員が来て、貸出していた。

その実態を見た本好きな院長が

「1年の大半を病院で過ごす患者さんも多いのに、本と言う娯楽がないのはおかしい！」

と言いだし、患者用の図書室が設けられることになる。

そして、この不況の中に運よく司書として雇われたのが、葛である。

「お昼なに食べたん？」

「いや、まだ…。」

明日からの準備をしていたら、時計を見ることを失念していたらしい。

啓人にうながされて時計を見る。昼はとうに過ぎていた。

「やと思った。」

食堂のおばちゃんが、時間内に来らんかったゆうて、心配しとったで。」

「あゝ」

食堂は、この病院の人たちにとって憩いの場だ。

ちなみに食べ物の持ちこみは可。

職場はほとんど一人のため、

食事や休憩時は、人の集まる場所に行き、話しをするのが日課になっていた。

いい大人が、さびしがり屋もたいがいにならないなあ、

葛は足の屈伸をしながら考える。

「かずらさん、お弁当？」

「うん。」

今日は早起きできたので、自分で作って来ている。

「ほんなら、中庭で食べや。あったかいで。」

啓人の親指の先、窓から外を見る。

春の陽ざしが、中庭の全体を照らしている。確かに暖かそうだ。

「そうしようかな。」

その陽気にふれたい衝動にかられ、今日は中庭にて食べることにした。

「ほい。」

「？」

紙パックの飲み物を渡される。

「購買のおばちゃんから。ちゃんと飲むのやで？」

「…はい。」

なんか、子ども扱いされた気がしないでもないが。
渡されたものを素直に頂くことにする。

このままで引き下がるのもなんなので、後で仕返しをしようと、決意して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5427u/>

あったかい、風が吹く

2011年10月8日02時28分発行